

ここで結論が出せないのは残念であるが、どのように追究すればよいか、その方法だけでも考えてみよう。

(1) イタリア語に限らず、もつと広く、**F**の例を集めて整理してみる。

(2) 上述の**flore**「花」, **foglia**「葉」, **guado**「浅瀬」etc. の語を、それぞれ語源にさかのぼり、それらの意味変化の歴史を調べてみる。

諸者諸氏の御意見を賜りたい。

## mhd の 否 定 表 現 (その1)

### - ne (en) について -

岡 崎 忠 弘

ドイツ語史に於ける否定表現の型を簡単に示せば：

ahd. (750~1100) mhd (1100~1500) nhd. (1500~)

ni mac ne (en) mac niht mag nicht

となる。

mhd.では一般に本来の否定詞ne (en)と否定補足語nihtとで否定は表示されるが、この両者の力関係を観察してゆくことが、この小論の目的である。他の諸言語に於けると同様にドイツ語にあつても、本来の否定詞ne (en)は否定の補足語nihtと共存ののち、客分たるnihtに駆逐され衰退への道を辿っている。Der Nibelunge Not (推定成立1200年頃)に於いては、或る時はne (en)が、或る時はnihtが脱落していて、必ずしもne (en) - nihtの原則型で否定が表わされていない〔(注) nihtの脱落の可能又は必要な場合：①他の否定代名詞、否定副詞が存する時。nihtはne (en)とは併用されるが、これ以外の否定を表わす語とは併用されない。①dāheim, lēkein, kein, dēwederを含む文に於いて②„weiter“ „etwas weiters“の意のander, anders, mere, baz, furbazを含む文に於いて。usw. ne (en)の脱落の場合：① enが文頭にくる場合。② niht及びその他の否定詞が動詞の前に立つ時、enは多く脱落する。〕

ne (en) -niht という原則的否定表現は固定したものではなく大きく揺れている。この振幅を見て少  
 ことによつて、ne (en) の衰退の程度と niht の発展の勢いとを把握できることに着目し、Der  
 Nibelunge Not の約三分の一に当つてカードをとり、整理しまとめた。

§ 1. ne (en) の単独使用	11回
niht の単独使用	108回
ne (en) と niht の併用	86回

ne (en) が niht その他の否定詞を伴わずに単独で否定を表わしている事例が 11 回も見い出  
 されるという事は注目に値する。Der Nibelunge Not は韻文で書かれているから、niht  
 その他の否定詞を用いると Reim が崩れるため、ne (en) が単独で使用されたのだと思われる  
 が、それにしても、他の否定詞を伴わずとも、ne (en) は否定概念を表わす力を有していたこと  
 が分る。しかし、一方 niht の単独使用は ne (en) の 11 回の約 10 倍に当る 108 回も見い  
 出される。この数字は ne (en) と niht の併用の 86 回にも優っている。このことは niht の否  
 定概念を表わす力が、ne (en) にくらべて如何に強大になつていたかと明瞭に物語っている。

ne (en) という本来の否定詞を補足し、否定概念を強調する niht から、「補足強調」の色合い  
 は意識されなくなり、普通の単なる否定概念を表示する niht へと移行した。〔(注) ① ne (en)  
 と niht との併用は、多くの近代語とは異なり、二つの否定詞が否定概念を相殺して肯定と  
 はならない。② ne (en) の単独使用、niht の単独使用、ne (en) と niht の併用、この三  
 者間に否定概念の強調という点では特にその差異は見られない。否定概念の強調の方法は、小さな  
 もの、無価値なものを表わす具象名詞、たとえば ei, brot, wicke, ber, usw. の四格に否  
 定詞を添えて表わすか、或いは wint, tiufel を用いるかの二つがある。後者の例として：

Swaz kleider ie getruogen edeler riter kint, wider ir gesi-  
 nde daz was gar ein wint. (位高き騎士の娘がどんな衣裳をつけたとしても、彼女  
 の侍女たちにくらぶれば物の数ではなかつた)。„Ich bringe iu den tiufel,“  
 sprach aber Hagene. (「私は貴女に何ひとつ持参しておりません」ヘゲネが重ねて言  
 つた)。〕

§ 2. 次に ne (en) の用いられ方を見てみると：

Dó der sêre wunde des swertes niht envant, (深傷を負つた勇士  
 は剣を見い出し得なかつたので)

ino fürhte in niht sô sêre, daz ich werde sin wîp.

(私は恐怖のために、彼の妻となるようなことは決してない)

jane mag ich alsô lîhte gerûmen mîniu lant. (そうやすやすとこの国をたちのくわけにはゆきません)

des enkunde iu ze wâre niemen gar ein ende geben. (果して何人が残りなく語り尽すことができよう)

これらに見られるように、**ne (en)** はいずれも代名詞・動詞・助動詞その他の品詞と結合して現われている。他の品詞と結合しない独立の形で現われる事例を発見することはできない。このことは、**ne (en)** がその音量の点からもその力を失いつゝあることを示していると考えてもよいであろう。更に、**ne (en)** の結合する相手も動詞と代名詞と助動詞のいくらかと **ja** その他に限定され、固定している。どんな語とでも結合できる程に **ne (en)** の結合力は強くない。**niht** その他の否定詞の併用のため、**ne (en)** が結合の形で現われるようになったのか、それとも、**ne (en)** が結合の形をとり始めたので他の否定詞が併用されるようになったのかは即座に判定定し難いが、いずれにせよ、(**ne (en)**) が他の語と結合し組み入れられて用いられるようになった事実は、**ne (en)** の力の衰え以外の何物も意味しはしない。

§ 3. **ne (en)** の **nie, niemer, niemen, kein** との併用 36回

**nie, niemer, niemen, kein** の単独使用 75回

こゝでも **niht** の場合と同様に、**nie, niemer, niemen, kein** はその否定の力を強め、**ne (en)** の補足強調の立場から、独立した否定詞へと発展の様相を呈している。自分の分身に自分が追い出される結果となつてはいるが、音量の点から見てもこれは当然のことである。何故なら、否定ほどその概念を明示、強調しようと話者の努めるものはないから。

§ 4. 以上見てきたように、音量に乏しい **ne (en)** は他の否定詞を呼び寄せ、併存し、そして衰退へのきざしを見せ始めているが、然らば、この **ne (en)** は何処へ消えていつたか。mhd. から姿を消したわけではない。**ne (en)** が他の語に付着せず独立した形では用いられなくなつたが、不定代名詞や副詞と結合して一語となり、否定の代名詞・否定の副詞として生きのびている；**niht** は勿論のこと、**nie, niemer, niemen usw.** としてその形跡を留めることとなる。

## § 5. む す び

少くとも、*Der Nibelunge Not*に於いては、*ne (en)* は *nih̄t* その他の否定詞と対等の立場に立つものではなく、補強のために置かれた否定詞にその席を譲ろうとしている。辛うじてその余命を保っている。換言すれば、*nih̄t* その他の否定詞は、補足強調の身分から主客を追い出し、自分一人で否定概念を表わし得る地位にまで昇格している。即ち、*ne (en) - nih̄t* の原則は、新興の *nih̄t* の力が強大になり、その均衡は破られ、新興はその力を益々増大し、旧勢力は没落を益々早めてゆくだろうと推察される。

さて、今回は次の問題について述べたい。

1. *ne (en)* の脱落と *nih̄t* の脱落について、今少し詳しく個々の事例に検討を加えて論じたい。
2. *wan̄ic, selten, lutz̄el, klein usw.* を中心にして、*Der Nibelunge Not* に見られる否定の種々相について述べたい。
3. *ne (en)* と *nih̄t* との力関係を *mhd* の他のテキストでも調べ、その結果を *Der Nibelunge Not* の場合と比較検討してみたい。

( 続 )

## 新訳聖書(マタイ伝)に見られる

## 否定表現に就て

### — ou と mē の用法上の相違 —

竹 島 俊 之

1. ギリシヤ語には否定辞に *ou* と *me*、及びその合成語 *oudeis mēdeis oute mēte oupote mēpote* 等の二種がある。両者の用法上の差は極めて微妙であるが、大体次のような差がある。*ou* による否定は事実の否定であるのに反して、*mē* による否定は希望、想像等、何らかの話者の主観的観点の介入したものの否定を示す。後者の用法はその源を原印欧詩に持つ